

ナシ黒星病

1 病原菌の生態

- (1) ナシ黒星病菌 (*Venturia nashicola*) は糸状菌(かび)の一種で、和ナシを含めたアジアナシにだけ寄生し(西洋ナシには寄生しません)、特に主要品種の幸水では最重要病害として恐れられています。多湿、低温条件を好み、菌糸の生育適温は 20℃、最高 30℃、最低 7℃です。
- (2) 本病の第一次伝染源は、病原菌が潜伏している芽基部りん片及び前年の罹病落葉です。芽基部りん片では、3月上旬頃から分生子が形成されます。また、罹病落葉では3月中旬以降に子のう胞子が形成されます。これらの分生子や子のう胞子は、降雨等で十分な水分を得ると飛散して二次伝染を繰り返し、葉や果実に感染します。

2 被害の様子

(1) 芽基部病斑

葉、葉柄、果実及び新梢(主に長果枝)に発病します。春先に最も早く現れるのが芽基部病斑で、花芽や葉芽の基部近辺に黒い病斑(指先でこすって黒い粉がつけば黒星病)をつくります。芽基部病斑は一般的にりん片が固着しているので、りん片が脱落していない芽を探すことが発見のポイントです。

(2) 春型病斑および秋型病斑

葉裏や葉柄には、開花 2 週間後以降に黒色ビロード状の病斑(春型病斑)をつくります。葉柄に発病すると落葉しやすくなります。また、夏から秋にかけて、葉裏に薄墨色の病斑(秋型病斑)を点々と形成します。これは、翌年の第一次伝染源となります。

(3) 果実の被害

最も問題となるのは果実の被害で、幼果期に感染すると、黒いすす状の病斑をつくり、果実のゆがみや裂果を生じます。また、ほとんどの品種では6月上旬以降は感染しませんが、幸水など黒星病に感受性の高い品種では肥大後期まで感染して黒くへこんだ病斑をつくり、商品価値を失わせます。



写真1 幼果の症状



写真2 成熟果の病斑



写真3 秋型病斑

3 発生について

(1)発生条件

- ア 開花直前から開花後約 2 週間までの降雨日が多いと、発生が増加します。
- イ 梅雨明けが遅く、いつまでも雨が続く涼しい年には、発生が多くなります。
- ウ 10～11 月に雨が多く、葉の秋型病斑が多いと、翌年の春先に発病が多くなります。
- エ 低温地や窒素肥料過多の園では発生が多くなります。

(2)発生時期

- ア 開花前～開花後 20 日間
- イ 6 月下旬～7 月中旬(梅雨後期)
- ウ 9 月上旬～11 月上旬(収穫後から落葉期)

4 防除時期と防除方法

(1)耕種的防除

- ア 罹病した芽は、発芽期にりん片がきれいに脱落しないので、それを目安にハサミできれいに切り取り処分します。その後も、芽基部、花そう基部や葉、葉柄、幼果などに黒いすす状の病斑を発見したら、直ちに摘除し、園外で処分します。
- イ 園の排水をよくするとともに、混み過ぎた枝葉を整理します。
- ウ 落葉は休眠期間中に集め、土中に埋めるか、園外で処分します。

(2)薬剤防除

- ア 10a当たり 200 リットル以上を、かけむらのないように散布します。
- イ 梅雨期及び秋雨期には、固着性展着剤を加用すると効果的です。(7 月下旬に使用すると商品価値が下がります。なお、梅雨明け直前は、薬剤の付着が目立つため使用しない。)
- ウ 多くの薬剤は予防効果が主ですが、DMI 剤(ステロール脱メチル化阻害剤)は、予防だけでなく治療効果もあります。しかし、薬剤耐性菌の発現を防止するため、他の薬剤を混用して年 2～3 回の使用にとどめます。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

- 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会
- 問合せ先(原稿執筆)
埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409
埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661



©埼玉県 2005

彩の国埼玉県